

2014 年度第 2 四半期決算説明会 主な質疑応答

開催日:2014 年 11 月 4 日

出席者:代表取締役 社長 中村 邦晴
専務執行役員 CFO 猪原 弘之
常務執行役員 主計部長 高畑 恒一
インベスターリレーションズ部長 大山 暢郎

【決算概要補足】

社長のプレゼンテーションに引き続き、高畑主計部長より以下資料に基づきセグメント別の業績等について補足説明。

http://www.sumitomocorp.co.jp/files/topics/28076_ext_01_0.pdf

<セグメント別第 2 四半期実績(前年同期比)及び通期見通し 資料 12、13 ページ>

○金属

- ・北米鋼管事業、海外スチールサービスセンター事業等堅調。新規買収したエージェングループも順調に進捗。

○輸送機・建機

- ・海運市況の低迷及びインドネシア自動車金融事業が保険業法改正の影響を受けたことなどにより前年同期比減益。
- ・下期はメキシコ完成車製造事業が寄与することを見込む。

○環境・インフラ

- ・海外電力事業など堅調。
- ・下期にかけて新規の IPP 事業の収益貢献が開始されることに加え、再生可能エネルギー発電分野におけるバリュー実現を見込む。

○メディア・生活関連

- ・J:COM、SCSK など主要事業会社が堅調に推移。
- ・下期に TBC の減損可能性額 80 億円を織り込んでいるが、これを除くベースでは、主要事業会社が引き続き堅調に推移することに加え、マンションの引渡ならびに一部不動産の売却を見込む。

○資源・化学品

- ・減損等を除いた第 2 四半期実績は、228 億円。この中には、北海油田権益売却益約 100 億円が含まれているが、鉄鉱石などの市況低迷の影響やアンバトビーニッケルプロジェクトにおける減価償却費負担があり、前年同期比減益。
- ・減損等を除いた通期見通し(260 億円)においても、鉄鉱石市況などの低迷が継続する影響に加え、インドネシア銅事業において同国新鉱業法により 6 月～9 月に生産をストップした影響などがあり、前年比減益となる見通し。

なお、期初予想には、エジエングループやメキシコ完成車製造事業などの新規投資案件から年間100億円程度の利益貢献を織り込んでいるが、第2四半期時点でこの約1/3程度が計上されており、通期も想定どおり進捗する見通し。

<大型投資案件の減損(見込み)内訳について 資料14ページ>

- ・第2四半期実績における税効果については、タイトオイル開発プロジェクトに対する単体からの投資の評価損計上に関わるもの。
- ・全社又は消去の通期見通しに織り込んでいる税効果99億円は、下期に見込まれる減損などを踏まえたもの。

【質疑応答】

<株主還元>

Q. 9月29日の業績下方修正発表時点では、期末配当は未定としていたが、今回期初予定通り25円と決めた理由を教えてください。

A. 上半期実績を踏まえ、通期見直しレビューしたところ、減損を除いた業績は堅調であることが確認でき、期初予想2,500億円達成の確度が高いと判断したものです。

Q. 今期実績が想定より下振れた場合でも配当は維持するのか。

A. 大幅赤字に転落するようなことがない限り、配当は維持したい。

Q. 来期以降の配当方針をどのように考えているか。

A. 株主には従来同様に安定配当を実施したいと考えており、今回のような大口減損によって配当が大きく左右されないような方法を模索していく。

<次期中期経営計画(次期中計)の方向性等>

Q. 次期中計では投資、配当、自社株買いに対する資金配分をどう考えるか。

A. 従来より、当社は、リスクアセット(RA)をコア・リスクバッファ(RB)の範囲とすることを経営の根幹に据えているが、今回の大口損失等の影響により、当期末にはRAがRBを超過する見通しである。まずは今後2~3年でこれを回復させることが最優先と考えている。この1、2年では、キャッシュを投資に回して、着実に収益力を高めていく必要があると考えている。従来より、株主に対しては配当で還元していきたいと考えており、収益力強化により配当の増加を図っていきたい。

Q. 次期中計においてどのように投資を行っていくのか。

A. 大枠として、借入金を増加させずに成長する方向に転換したいと考えている。まずは、リスクマネジメントやコーポレートガバナンス、会社の意思決定プロセスの見直しを行っていく。資源上流分野については、より明確な資源上流戦略を策定するまでは、既存案件の立上げに最優先に取り組んでいく。非資源分野では、BBBO2014でも取り組んでいる、当社の強い分野をより強くすることを更に進めていく。現在よりも、もう少しビジネスを絞って、より積極的に経営資源の再配分を行っていきたい。

Q. 借入金に頼らない成長を行うということは、フリーキャッシュ・フローを黒字にするということか。また、グロスの投資額の規模感について教えてください。

- A. 次期中計期間中のキャッシュ・フローをプラスにすることを目標として考えている。今後金融情勢がどのように変化していくかもわからず、過度に外部からの資金調達に頼らない財務体質にしていきたい。グロスの投資額については、次期中計策定の中で考えていくが、現状、一時的な減損を除く当期利益は2,500億円程度がベースになっており、配当支払後のキャッシュ・フローベースでも従来の金額規模とあまり変わらない投資余力はあると考えている。

Q. 今回大型投資案件の減損等により通期見通しは下方修正されたが、持続可能な利益水準をどの程度と考えているか。

- A. 基本的には基礎収益が持続可能な利益に相当すると考えている。非資源ビジネスの基礎収益は2012年度の1,800億円から2014年度は2,300億円に伸びる見込みであり、今までの取り組みの成果が上がってきていると感じている。今後、2015年度、2016年度と伸ばしていく為には、例えばエゼングループやメキシコ完成車製造事業のような既存投資案件からどの程度リターンが出てくるかによると見ている。

<個別事業>

Q. 輸送機・建機事業部門の下半期見通しが上半期実績比▲30億円程度落ち込む理由を教えてください。

- A. 中東などに向けた自動車の輸出について、昨今の地域情勢等を踏まえ減速することを織り込んでいる。

Q. TBCは、通期では減損可能性額を除いても持分損益で▲30億円程度を見込まれているが、足元の状況はどうか。2015年にEBITDA 2億ドルを目指していたと思うが、現在の目線としてはどの程度を見ているか。

- A. 卸売、小売、フランチャイズの3セグメントの中で、問題は小売部門。昨年度から取り組んでいる再建計画について、効果の出ている店舗もあれば、あまり効果が表れず引き続き赤字が続いている店舗もある。全体のEBITDAは、現在の再建計画比1年から1年半程度ビハインドしている状況。このような現状を踏まえて、現在、来年度からの計画を見直しており、11月末を目途に見直し後の新計画を会社として承認する予定。減損については、計画を見直した後で、減損テストを改めて行うことから、恐らく第3四半期点で金額は確定するだろう。

Q. アンバトビープロジェクトの現在のエクスポージャーと足元の状況、及び今後の見通しを教えてください。

- A. リスクエクスポージャーは27億ドルで第1四半期時点と変わらない。7～9月は、ニッケル価格が堅調であり、追加の資金拠出の必要なかった。今年1-12月の稼働率は概ね計画通り60%～70%となる見込み。10月は75%程度であった。11月には定期修理を行う予定であることから稼働率は多少落ちるが、12月から本格的に完工に向けて稼働率を上げて行く。来年前半には完工を達成し、早期にフル操業に持っていきたい。全体として経験値が上がってきており、トラブルシューティングに要する時間も短縮されてきており、目標に対して着実に進んでいる状況。

以上